

地域課題への取り組みを起点とした学部・教職大学院－教育委員会の連携の試み－ －災害経験の記憶と継承のために－

島根大学教育学研究科(教職大学院)准教授 丸橋静香
島根大学教育学部 准教授 川瀬雅也

はじめに－地域課題としての「災害経験の記憶と継承」－

被災経験は、防災のために記憶・継承される必要があるが、被災した地域や学校は日々生じる事柄への対応に追われている。そこで、近隣の大学や大学院の授業のなかで被災地域の経験をすくい上げ考察することは、防災に向けた被災経験の整理の一助となると思われる。平成29年度前期、島根大学教育学部と島根大学教職大学院は、それぞれの授業「地域総合研究」と「社会変化と学校役割」において、平成28年鳥取中部地震に遭った倉吉市における学校や行政の被災経験を、教育委員会からの協力を得て、学生の学修課題に設定した。本発表では、地域課題としての災害経験の省察に取り組んだ、島根大学教育学部・教職大学院の授業活動の報告を行う。

1 教育学部生(共生社会教育専攻)の学修活動:「地震災害と地域社会」をテーマとした「地域総合研究」

- 1)「地震に対する教育現場の備え/対応」(1班):倉吉市教育委員会学校教育課において地震対応に関する講話と質疑/倉吉市立上灘小学校・倉吉市立東中学校において教育現場での地震対応についての講話と質疑/地震により大きな被害を受けた倉吉市学校給食センターを訪問。現地見学、講話、質疑。
- 2)「地震に対する地方行政の備え/対応」(2班):倉吉市役所防災安全課において、地震対応に関する講話と質疑/倉吉市社会福祉協議会において災害ボランティア活動その他についての講話と質疑/倉吉市上北条公民館において、地震対応についての講話と質疑。
- 3)「地震に対する住民の備え/対応」(3班):白壁土蔵群周辺の商店街において、住民の地震への対応についての聞き取り調査/倉吉市上北条公民館において、地震対応について講話と質疑/大社湯(銭湯)において、被災と復興の状況についての講話と質疑。
- 4)「地域における文化財被災への対応」(4班):倉吉市教育委員会文化財課の職員による、倉吉市の文化財(白壁土蔵群等)被災の状況についての現地説明/倉吉博物館(当時、被災によって閉館中)を訪問し、博物館館長、および、鳥取県教育委員会文化財課職員による被災状況や復興・復旧についての講話と質疑。大社湯(銭湯・登録有形文化財)において、被災と復興の状況についての講話と質疑。



2 教職大学院生の学修活動:「防災・減災のための学校づくり」をテーマにした授業「社会変化と学校役割」

教職大学院(教育学研究科教育実践開発専攻)の必修授業「社会変化と学校役割」において学生(全15名)は、倉吉市・諸学校の災害経験の省察をととして、「災害と教育」に関する問い「児童・生徒の命を守る方法とは?」/「防災における地域コミュニティーにおける学校の役割とは?」等について考察し、防災・減災を意識した学校づくりの方略を探究した。

・被災した学校(倉吉市内の教職大学院学生派遣校)における聞き取り

まず授業時間の確保等の関係上、学生自身が被災地域に出向くことが難しかったため、授業担当者(丸橋)が、被災経験をもつ倉吉市内の小学校1校・中学校1校(いずれも教職大学院生派遣校)に出向き、校長から被災時の様子(児童・生徒の避難、保護者への引き渡し、児童生徒の「心のケア」、校内・校区の安全確認、避難所運営における行政との連携等)について聞き取りを行い、それを大学院生の授業のなかで紹介した。なお、その前後に、実務家教員(小学校校長経験者)により「学校の安全/危機管理」、地学・環境を専門とする研究者教員により「山陰の地層的特徴と防災教育」についての講義を行った。

・「防災・減災のための学校づくり」に資するケースメソッド教材の開発・実践

学生は次に、これらを踏まえ、且つ現職学生自身の教員としての被災時の経験を基に、「子どものいのちを守る」「地域防災における学校役割」のための方略についての学習が可能となる、討論型教授法(ケースメソッド)の教材(討論用ケース)を開発し、模擬実践を行った。

3 鳥取県中部地区での成果発表会(後援:鳥取県教育委員会・倉吉市教育委員会)

・平成29年度・島根大学教職大学院・夏期/地域教育課題支援事業:「災害 × まち × 教育—学校の役割を考える—」の開催(8月4日 於:倉吉市上灘公民館)

【第一部】教育学部生による倉吉地区での被災状況・経験に関するフィールド学習(6月実施)の成果発表



【第二部】教職大学院生による「災害と教育」に関するケースメソッド・ワークショップ

※ ケースメソッドとは教員研修等で近年用いられるようになったケース(事例)に基づく討論型の教授/学習方法です。



【第三部】講演会「災害と厄災の記憶は伝えられるか—山陰地方で考える—」(京都大学・山名淳先生)

鳥取県中部地区ご出身というお立場から倉吉という街のかたち(アーキテクチャ)、またご自身の研究成果(『災害と厄災を伝える:教育学は何かできるのか』(山名・矢野編著、勁草書房、2017年)を踏まえ、災害経験の記憶を可能にする「厄災の教育」「弱い教育」の構想についてお話をいただいた。防災教育の新たな視点として興味深いものであった。

〈まとめ・考察〉

- ・「災害」という学校教育の焦眉の課題に大学側が、取り組む、貴重な経験となった。
- ・地域の教育関係者からも、被災経験を再考する良い機会になったという感想をいただいた。
- ・「連携」と言いつつも、大学側が、地域から一方的に学ぶ、というかたちになってしまったことは否めない。
- ・大学側の活動(例えば教員研修方法としてのケースメソッドの提案)が地域にもっと有意義に実感してもらえるよう、工夫が必要。

